
メリーゴーランド幻想

長月 タ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メリーゴーランド幻想

【Nコード】

N0684A

【作者名】

長月 夕子

【あらすじ】

メリーゴーランドは影のようにいつもそこにあった。

僕はメリーゴーランドというものが好きではなかった。乗ってみたいとも思わなかったし、むしろなるべく近寄りたくなかった。

小さい頃はそれでも仕方なく親の希望に応じて色んなメリーゴーランドに乗ったものの、素足が触れる冷たい馬体には鳥肌が立った。僕は馬が嫌いという訳ではない。ただ、メリーゴーランドの馬たちが嫌いだった。流れ続ける終わりのない単調な音楽も、中央の柱の使途不明な鏡も、只管に僕を脅かした。

しかし僕は成長するという武器を持っていたので、多くの子供がそうであるように、何事もなくメリーゴーランドから逃れる事ができた。あんなに馬に乗りたがった友人たちも「かつこ悪いよ。」という理由で離れていった。恐怖は僕の視界の隅に追いやられ、いつしかそれがある物として感じることもなくなった。

そして僕は大人になった。

終業の放送が流れる遊園地で、僕は担当していた遊具の点検をいつものように手早く済ました。（本当は規則違反なのだが）タバコに火をつける。夕暮れが全ての遊具を何か意味ある物ののように浮かび上がらせていた。僕はそれらの眩しいプラスチックな光を見ながら煙を吐き出した。「おつかれー！」スタッフの一人がそう声をかけながら横をすり抜けていった。タバコの火を消そうと灰皿を探す僕の足元に、長い影を落とす遊具が目に入った。

逆光のメリーゴーランドが一際眩しくそこにあった。

柵に手をかけると、ぎつと軋んだ音を立てる。僕は目を細めながらしばらくその馬たちを眺め、そしていつかの恐怖を思い出している。この馬たちもまた、触れれば温かいような見事な体つきをしている。強い風をはらんだ鬣といい、駆りだした足の筋肉といい、あごをぐつと引いた顔といい、ただ同じところを緩慢にぐるぐる回るだけにしては、異常なまでに血気盛んな体を夕暮れの光にさらして

いる。

「ああ」と僕は思った。

言い様のない恐怖が、僕を足元から捕らえた。それがはつきりと囁くのが聞こえたのだ。

僕はこの恐怖から逃れられないだろう。今までも、そしてこれからも、と。その時だ。本当にその刹那、何かがからりと変わってしまった。この場に感じることはない多くの生気が僕を包んだ。恐ろしさに身動きする事もできない。見つめる先にメリーゴーランドの鏡。凝視する鏡の向こうは何も変わらないのに、僕の周りだけ瞬時に全てが入れ替わったのだ。まるで素敵な手品のように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0684a/>

メリーゴーランド幻想

2010年11月24日05時48分発行